

新文明期への移行と哲学の再定義 —新たな時代区分に基づく考察—

Transformation to the New Era of Civilization and Redefinition of Philosophy: Based on a New Division of History into Four Epochs

菅原 浩

SUGAHARA Hiroshi

We divide human history into four cultural epochs: 1. The age of native cultures; 2. The age of classical civilizations; 3. The age of the modern Western civilization; and 4. The age of the new global civilization. We argue that what classical civilizations accomplished in terms of philosophical exploration should be respected and revived, and that philosophy should be redefined as a way of life as in the ancient era. Dualistic understanding of the world will be replaced with the monistic understanding of the classical civilizations, thus facilitating the awakening of human consciousness.

キーワード：文明の転換、東洋哲学、一元論、二元論、新しい意識

Keywords : Transformation of civilization, Eastern philosophy, monism, dualism, new consciousness

1. 現在の哲学は真の意味でグローバルな価値を持っているか

ここでのテーマは「哲学の再定義」ということである。いま人類社会がどういう状況にあるのかと考えると、歴史的にまったく新しいステージに突入しようとしている時代にある。そこで、最も古い知的探求ともいえる哲学というものとはどのようなものであるのか、ということ、過去のしがらみ、枠組、概念からできるだけ自由に考察しようという試みが求められる。再定義というのは、従来、これが哲学だと考えられてきたものは本当に価値があるのか、哲学とは違うものであってもいいのではないか、という問いを意味する。

ここで従来の哲学というのは、いわゆるアカデミックな哲学ということを使う。現実に今の近代社会において一種のエスタブリッシュメントとして存在している学術的な哲学のことである。これは西洋近代社会の生み出した文化事象の一つであり、これは真の意味でグローバル・スタンダードであるのか、という問いがある。

結論から先に書くならば、こうした哲学は決してグロー

バルではなく、近代ヨーロッパ文明に固有なものであり、必ずしも他の文明が真似をしなければならない、というものでもないとする。哲学は古代からの歴史がある。ヨーロッパ哲学だけではなく、インド、中国、イスラームといった文明圏にも哲学はある。グローバルというなら、それらすべてを視野に入れて統合をしていく哲学であるはずである。だが現状としては、近代のヨーロッパで行われてきた学術的な哲学がほとんど研究のすべてになっているという状況は、一種の偏りがあると考えられる。

実際、そうした学術的な哲学という世界で何が行われているかをよく知らない一般の人々は、哲学に対してどういう印象を持っているであろうか。おそらく、「生きるとはどういうことか」とか、「私が存在しているとはどういうことか」「この世界はなぜあって、どこへ向かっているのか」といった、いわば、人生に関わる究極的な問いを考えるもの、というイメージを持っているのではなかろうか。そこで、哲学というものがあって、そこでは何らかそれについての深い洞察があるのではないかと期待する人も少なくないだろう。

それがいわば、ブランドとしての哲学というものである。だが、実のところ、いまの学術的な哲学は「生きるとはどういうことか」というような問いを正面から扱っているものではないのが実態である。そういう探求を期待して大学で哲学を専攻するとあまりの違いに驚くことになる。実際のところ、哲学という学問は「入学してがっかり」の確率がとても高い分野ではないかさえと思う。中にはそれが面白いという人もおり、そういう人が大学に残って受け継ぐことになるわけであろうが。

半世紀以上も昔、丸山真男が、タコツボ学問という論評をして話題になったことがある¹。日本の学問受容のあり方を論じたもので、みな自分の専門分野の知識だけを、全体への視野なしに輸入してきたため、タコツボのように自己の専門に閉じこもるという形になっているとの批判であった。哲学がタコツボ化することは本来矛盾だけでも、日本ではタコツボ化したということである。それから月日は経ったが、日本の学術的な哲学界はタコツボ状態から脱した、と言い切れるものであろうか。

タコツボというのは、いろいろな「流派」が混在している状況である。ある人はカント、またある人は分析哲学、はたまたポストモダン、というように…だが、重要なのは全体への視野である。特にそこで重要なのが、文明論的な視座だと考える。文明変動という大きな視野の中で哲学をとらえるということである。具体的に言うと、現在は、ヨーロッパの近代文明の原理が終わりを迎えていて、そこから新しい人類の文明が誕生しかけている時代である。真の意味でグローバルな文明ができるかどうかという時代とも言える。IT技術の革命により世界が瞬時に結びつくようになるというまったく新しい文明が生まれつつある。ともすれば、欧米的な価値観に合わせるのがグローバル・スタンダードだと考えられがちであるが、そうではなく、むしろ欧米ではないローカルな文化や価値観がその存在を主張しているのが現代だという面もある。無数のローカルの集合体であり、かつそれらが調和的に運行されている、という文明を人類は作れるのか、という時期なのだと思う。

文明論的に言えば、西洋近代的な原理だけでは成り立たなくなってきた、ということであり、西欧近代の文明原理の行き詰まりが見え始めたということになる。もちろん、過去にもたくさんの「近代の超克」という試みがあったわけであるが、それらがファシズム的な危険な方向をも生み出したという歴史的経緯もあった。そういう「偽りの超克」もまたたくさんあったことも事実である。

2. 人類史の四つの時代区分とその哲学

その、西欧近代の文明原理とはどのようなものであるか。それは哲学と関係があるか。

そもそも西欧社会が近代において圧倒的に世界を支配したのは、その科学技術の力のためであったことは否定できない。その圧倒的な力の差を目の前にして、それを自分たちも身につけなければ植民地にされてしまう、という危機感を抱いたのが幕末や明治の日本人で、そのために必死に西欧のことを学んだ。哲学もそういう脱亜入欧、文明開化の中で輸入された。そこにはそもそもこうした西欧の優位性をもたらした文明原理とは何であるのかという問いがあったはずだが、実のところ、なかなかその当時の哲学を学ぶだけではその答えには到達しにくかったように思われる。

ヨーロッパ文明の根っこには何があるのかということ、なかなかタコツボ的研究では見えて来ない。つまり、近代がすでに成立した後で、その秩序の中に位置づけられた哲学だけを見ても、全体は見えないわけである。それとは違う哲学のあり方を知らないと、近代ヨーロッパ哲学にはどのような特質があるのか見えて来ない。いわば、パラダイムというか、近代西洋哲学の暗黙のルールみたいなものは何なのかを見破る必要がある。

実のところ、もう近代文明の終わりにさしかかって、ようやく、ヨーロッパの近代文明とは何だったのかが見えてきたのではなかろうか。

それはどういうことであろうか。そのためにまず、人類の歴史を振り返って、大きく時代区分をしてみたいと思う。私は人類の文化史を、その哲学的な傾向から見て、次の四つに区分することを提案したい。すなわち、1. ネイティブ文化期、2. 古典文明期、3. 近代文明期、4. 新文明期である。

ネイティブ文化期とは、人類が成立して長い間の旧石器時代を中心としており、本格的な文明が誕生する前の時代である。日本で言えば縄文時代に相当する。

古典文明期とは、世界各地で文明が起り、エジプト、メソポタミアなどに始まり、インド、中国、イスラームなど、世界の近代化が始まるまでの時代である。

近代文明期とは、西ヨーロッパ諸国において科学革命・産業革命が起り、それにもとづいて世界各地の植民地化が開始されるとともに、全世界的に近代化、西洋化の波が押し寄せた時代を指している。だいたい17～18世紀から20世紀の中頃までである。今から見ればこの時代は過渡期とも言える。

そして新文明期とは、近代文明が進んだ末に、大規模な情報テクノロジーの発達が見られ、情報伝達の革命的な進展によって、真の意味での地球社会が出現し始めている時代である。この時代は、ほんの始まったばかりであり、20

世紀の末、1990年代頃から始まったとみたい。PCやインターネットの普及と共に進展してきたものである。今後はAIの爆発的な発展が予想される。新文明期とは「新」を強調した言い方であるが、「地球文明」という呼び方も可能であろう。

2-1 ネイティブ文化期

第一に、今の人類が成立して、長い間、今からすれば物質的に素朴な生活をしてきた。精神的にも素朴だったのかというと決してそうではなく、高度な精神文明が存在していたことがわかってきている。しかしその本質は近代人の世界観からは理解しがたいものであろう。これを私はネイティブ文化の時代と呼ぶことにする。日本では縄文時代などがこれに当たる。日本の文化の特徴の一つは、ネイティブ文化的な要素が近代に至るまで強く残存していることである。神道というものは本質的にはネイティブ文化的なものだ。欧米でもネイティブ・アメリカンの文化なども注目されてきている。

ネイティブ文化ということで近年注目されるのは、「アバター」(2009年)という映画の大ヒットである。この映画を見た人はおわかりと思うが、この作品では、ネイティブ文化のもつ精神性がテーマであり、その精神的なものを実に見事に映像化することに成功している。これに対して、その精神性を理解せず破壊しようとする近代文明が対比される。こうしたテーマは、ケビン・コスナーが主演した「ダンス・ウィズ・ウルブズ」(1990年)という作品にも見られたが、「アバター」は舞台をSF的背景としつつ、ネイティブの精神性をさらに踏み込んで描いている。そして、私の見るところそれは、ネイティブ文化の次に来る時代の哲学にも、本質的には通じるものだと思われる。これは、文明論的に見れば、ヨーロッパ近代文明がネイティブ文化に出会って、自己変容を迫られるということになるだろう。

宮崎駿監督の作品にも、ネイティブ文化の精神性というテーマは共通しており、実のところ「アバター」は宮崎作品をかなり意識しており、映像的な引用のようなものが見られることに気づいた人もいであろう。これは一種のオマージュである。

そのネイティブ文化の精神性とはどのようなものなのか。実を言うと、ネイティブ文化はそれを言語的に説明するような文化を持たない。つまり、ネイティブ文化で何が追求されていたのか、それを明確に言語化するためには、次の時代の哲学で発達した言葉を使う必要があるということである。

2-2 古典文明期の哲学

第二の時代、これを私は「古典文明期」と呼ぶ。それはネイティブ文化をある意味で継承して、それをさらに高みへともたらしたのである。古典文明期と私が呼ぶのは、近代化以前の世界各地の文明のことで、エジプト、ギリシア、インド、中国、イスラーム、そしてルネサンス期までのヨーロッパなどを総括する。ネイティブ文化において萌芽的に存在していた精神性は、古典文明期において深められ、古典文明期の哲学が発達した。これは人類の遺産のような

ものであるが、近代文明においてはあまり省みられることのなかった。

「ネイティブ文化に始まったものを一つの完成にもたらしたものが古典文明の哲学だ」ということは、ネイティブ文化で何を見ていたかということ、古典文明期にできた言葉を使わないと説明はできない、という意味である。言いかえれば、古典文明期の哲学によるコンセプトを使わずにネイティブ文化について語ることは困難である、ということでもある。したがって、まず古典文明期の哲学をよく理解することから出発しなければならない。

古典文明期の哲学がめざしていたのは、単なる知的理解、言語化的な理解だけではなく、いわば、全人的理解である。知性も身体も感覚もひっくるめての、存在のあり方そのものの問題であった。

この哲学を理解するために最もよい枠組となるのが、井筒俊彦の『意識と本質』²で提示された「東洋哲学の共時的構造化」であろう。

ここで言う、東洋哲学とはこの場合イスラームからインド、中国の哲学を指すのであるが、それらは結局みな同じような構造を持っているという。共時的というのは、時間軸を超えて、という意味であり、それらは本質的に同じものを見ている、ということでもある。

では何を見ているのかといえば、それがまさに核心ということになるのだが、井筒俊彦はそれを「無分節から分節化へ」と表現している。

この意味は、宇宙というか、存在というものは、最初は何も分かれていない状態にあって、そこにすべてが含まれている、という「一」であったということである。そこからいろいろなものが分かれて出てきて、存在の世界が展開される。実はここで存在しているかにみえる「私」というもの自体も、その無分節の世界から分かれて出てきているものだ、ということになる。存在の世界とは分節化によって現実化するのだが、また私たちはそうした分節化した意識のあり方を超えて「無分節」を経験することも可能である、とも言われている。これが東洋哲学が共通して言っていることだ、ということになる。井筒はイスラームの神秘主義哲学の研究から発し、それと同じ構造のものをインド哲学や中国哲学にも見たということである（そしておそらくギリシア哲学にも）。仏教もインド哲学の流れであるから当然これに含まれる。

仏教、禅などで「無」とか言われることがあり、あるいは「空」という言い方もされる。それは存在のゼロポジションの「無分節」を示す言葉である。有名な般若心経の言葉、「色即是空、空即是色」において、「色」というのは存在のことであり、存在世界はまた無分節であり、無から存在世界が生まれ、存在世界はまた無分節である、というような世界ヴィジョンの表現になる。

そのことを、単に知的にわかるだけでなく、全人的にわかるということ「悟り」と呼ぶのが仏教の伝統となる。そこで「無」とは「一」のことであり、「色（存在）」とは「多」であるとも言われる。こういう基本的な世界ヴィジョンが古典文明期の哲学にはかなり共通しており、その共通性がある上でのバリエーションなのである。このように「すべては一」であり、それは言い方を変えれば「す

べてはつながっている、分離しているものはない」ということになる。それを全人的に知るといえるのは別の言い方をすれば意識の拡張とも言える。ふだん個別の、自分と他の世界が分離されているかのような世界を経験しているが、そうした状態は仮のものであり、意識はその本来の状態においては、世界すべてとつながっており、すべてが分けられていない広大な意識そのものである、ということになる。

そういう意識を人間は経験できる、という見方が、古典文明期の精神の伝統にはあった。おそらく、ネイティブ文化の中でも、こうした直観は存在していたのではないか。たとえば、シャーマンと呼ばれるような精神性の優れた人は、今言ったような広大な意識を経験することもあったであろう³。すべてのシャーマンがそうであったとは言えないかもしれないが、さきほどあげた「アバター」の中で、神聖な樹があり、それはすべてなるものとつながっているという世界観が描かれるが、これは古典文明期の哲学と本質的に同じである。

そのように、世界各地の伝統の哲学をひっくるめて総括する、という考え方はあまり見かけない。日本ではそうした「非近代哲学」そのものがほとんど研究されていないか、あるいはヨーロッパ人の研究スタイルの真似であって、古典文明の遺産をふまえて近代文明と対峙するのだ、というような、岡倉天心みたいな気合いの人はほとんどいない。たとえば日本では、インド哲学というと仏教ばかりである。インド哲学そのものを、インド人が学ぶように学んでみるというアプローチは学者にはほとんどなく、欧米の仏教学者の真似になっている。古典文明期の哲学を総体的に見る視角からすれば、インド哲学と仏教の哲学はバリエーションの違いでしかない。同じことを違うように表現しているのである。決して、お釈迦様がまったく新しい真理を発見して、それまでのインド人の迷妄を払ったということではない。実を言うと、日本人はまだ本格的にインドの精神性と出会ってはいない。つねに仏教というフィルターを通してしかインドと触れていないのである⁴。

古典文明期の哲学は存在の根本である「無分節」においてすべてが一であることを体験するための哲学であった、とすることができるとは、それは、いま学術的に哲学と言われている行為とは、あまり関係ない。実は哲学という名称が同じだけでやっていることはまったく違うと言っていい。

哲学というのはもともと philosophy であって、哲学という訳語は明治のものである。西周によって作られたと言われる。philosophy というのは知恵の探求というギリシア語に由来するので、それ自体は、いろいろなことを意味できる。知恵の探求という意味では古典文明期の哲学にもあてはまる。

2-3 近代文明期の哲学

それではヨーロッパ文明に特有なものとしての近代文明期の哲学について考える。

新文明期の入口に立っている私たちからすると、この近代文明期は過渡的であったということになる。

そこでいくつかの重要な考え方が生まれたことは間違いない。基本的人権の思想、民主主義といった価値観の普遍性を疑う者は（一部の国の指導者を除いて）ほとんどいな

いであろう。

非ヨーロッパの文明にとって、近代文明とはまず圧倒的な物質への支配力という形で出会うものであった。科学技術に代表される自然へのコントロールの力である。これが軍事目的に利用され帝国主義を生み、ファシズムを生み、核兵器を生み、冷戦という人類破滅の危機をも生み出した。

しかし近代文明の全盛期である19世紀あたりまでは、自然の支配力を大きくすることにより人類文明が進歩するという考え方を疑う者はいなかった。世界のあらゆることは科学の力で解明されるという楽観的な雰囲気があった。そこで理性による人間の認識力は無限であるとの見方があった。デカルト哲学はこうした自然科学の発展を裏付けようという哲学であった。啓蒙主義の思想では、理性がキリスト教の神にかわる特権的な地位を与えられた。そうした理性をおのおの発揮する良識的な市民によって構成されるのが民主主義の社会であった。

しかし啓蒙主義以降のヨーロッパの思想史は、こうした理性絶対主義の限界を指摘し、その優位を突き崩す流れが強くなった。

それを整理していく図式として、古典文明期の哲学、すべては一つから分かれているという哲学を一元論と呼び、ヨーロッパにおいてある時期から優勢であった考え方を二元論と呼ぶことにする。

二元論とは、ここではキリスト教思想に由来する。他の古典文明期の哲学と異なり、キリスト教における神は、絶対的に世界から独立した者であり、神は世界の創造者であって、決して世界の一部、あるいは世界そのものではなかった。インド哲学、あるいはギリシア哲学においても、神とはイコール世界であり、神とはすべてなるものである。だがキリスト教の神は無から世界を創造するのであり、世界と神の間には対立があり、深淵がある。これがキリスト教の独自性である。

ヨーロッパ文明は、よく言われるようにキリスト教およびギリシア哲学という二つの思想から影響を受けており、ヘブライズムとヘレニズムなどと呼ばれる。ここでいうギリシア哲学とは、プラトンやアリストテレスだけではなく、プロティノス、プロクロス等のいわゆる新プラトン主義哲学を含んでおり、ヨーロッパ文明に入っていったギリシア哲学は実質的には新プラトン主義である。そしてこの哲学はインド哲学と類似した一元論の哲学であった。これは本来キリスト教の二元論とはあいいれない哲学であったが、その二つのバランスをどうとるかがヨーロッパ文明の動きを決定した側面がある。

キリスト教といってもビザンチンの流れをつぐ東方キリスト教(正教会)の地域ではむしろプラトン哲学的一元論の色彩が強く、二元論は後退している。ニュッサのグレゴリウスやマクシモスなど東方教父たちの思想や、その流れをつぐロシアの哲学はきわめて一元論的傾向を帯びている⁵。

中世からルネサンスにかけてみられた「存在の大いなる連鎖」⁶という思想は、プラトン哲学的な一元論とキリスト教的な二元論を、絶対なる神から流出する存在のヒエラルキーというイメージで統合する試みと見ることができる。

これに対して西方ラテン世界では、初期にはエリウゲナなど新プラトン主義的一元論の哲学も見られたが、アウグ

スティヌスは新プラトン主義の影響を色濃く受けつつも、絶対他力の信仰を説くことによって、次第に神の絶対性を強調する方向へ向かっていった。そうした方向を決定づけたのが中世後期のオッカムなどの神学者である。神と人とかいかに隔絶したものであるかを強調し、神についてはいかなる人間の思考も無意味なのであるから、神についての考察はそもそも学問から排除すべきだと考えた。形而上学の否定という流れはそこから始まっている。

また、西ヨーロッパのプロテスタンティズムに見られる「神の前における人間の絶対的な無力性」という感覚もその延長にあるが、これは、まったく東洋には見られないものである。神の隔絶性が強調されたので、「神は人間の世界をケアする」という発想が否定されるようになり、神は人間をどうにでもすることができるといふ神の全能性が語られるようになった。

この「神と人の断絶の感覚」が、ヨーロッパ文明の重要な特徴である。実はここでいう「神」というものも、この二元論において定義されているものであり、古典文明期の哲学でいう神とは異なる。このような「人と断絶した者としての神」という発想は東洋にはない。東洋では「神人一致」が原則なのである。

キリスト教にも神人一致をめざす方向性がなかったわけではない。東方教父ほか、そうした方向を追求した人々も少なくないが、そうした、一元へ向かう方向性と共に、神と人との厳格に峻別する二元論への傾向がキリスト教にはあり、西ヨーロッパでは最終的にそちらが優勢となったということである。

このように人と断絶された神は、むしろ人間を支配し抑圧する者のように感じる人々が徐々に始め、神にかかわって人がその理性をもって世界を支配する地位に就くべきであるという発想が生まれた。これが啓蒙主義の始まりである。

ベーコンの「知は力なり」というスローガンが示すように、世界を支配-被支配という構図で考えるという方向が、近代文明には生じたと言えるだろう。それは神が世界を支配するという構図をそのまま人間が乗っ取ったものである。こうした構図が、のちに近代文明が引き起こした、植民地主義、核兵器、生態系の破壊といった問題の源泉となっている⁷。

多くの環境保護の立場に立とうとする哲学が、一元論の回復という方向へ向かっているのは、こうした近代文明の原理への反省に立ってのことである⁸。

20世紀に至って、理性によって自然を支配し、理想社会を建設するという近代文明の理想は完全に頓挫することとなった。

ただ、ヨーロッパの内部でも、一元論的な思想への回帰を模索する人々も存在した。その一つがロマン主義の運動である⁹。たとえばシェリングの哲学には、明らかに、世界の根源としての「無分節」に近い発想が認められる。ヘーゲルの哲学も、一から多へ向かうという一元論的発想が含まれていたが、同時に近代的な進歩史観や理性中心主義もあり、そうした方向でむりやりまとめたようなものになっている。

大きくいえば「理性によってあらゆることを解明する」

という啓蒙主義の理想を突き崩してきたのが近代哲学の歴史でもあった。科学に見られるような主観-客観という図式で絶対に確実な知識を求めるといった方向性は疑われるに至った¹⁰。カントの哲学はそのような二元論的図式に疑問を投げかけるものであった。もっともそうした行為そのものもまた理性的論理的に遂行することが求められていたのだが。

決定的に近代の哲学を破壊したのはニーチェであって、そもそも理性的推論により何らかの真理に到達できるという立場を彼は取らなかった。「歌え、もはや語るな」である¹¹。真理の認識とは感覚を含んだ全人的なものでなければならず、理性のみを使用する方法で得られるものではない、という価値観の表明である。しかし考えてみれば、これは古典文明期の哲学では当たり前のことであり、むしろ「理性的に考えることのみによって真理に到達しうる」と信じること自体、非ヨーロッパ文化圏の人間にはなじみにくいのではなからうか。

またおそらく、ニーチェは「あらゆる枠組を超えた意識体験」の可能性についても示唆していたのではなからうか。それもヨーロッパ文明の枠組を超えた考え方である。非ヨーロッパ的、古典文明期の哲学から見れば、ニーチェは、重要な何かに気づいてはいるがかなりの混乱も混じっている人のように思われる。

しかしこの19世紀においてもなお、ヨーロッパ文明は、ほとんど「あらゆる枠組みを超えた意識体験」についての知識を持っていなかったのである。その混乱は知識不足によるところもあるかもしれない。

いやもちろん、そうした体験についての知識がまったくヨーロッパにはなかったわけではない。細々と、地下水脈のような形で続いていた¹²。それはたとえば、ヤーコプ・ベームの哲学などにも現れているものだろう。だがそれは、きわめてマイナーであり、文化の表舞台に出るといことはほとんどなかったのである。この地下水脈的なものは、ルネサンスの時代に一時表に現れたことがある。それは新プラトン主義の色彩が強かった。つまり一元論的であり、また、そちらの方がむしろ「世界標準」の思想であった。しかし最終的に理性優位の二元論が主流になると、それらは変なものともみなされ、そこでできたレットテルが「神秘主義」という言葉である。

神秘主義という名称は、最終的に神人一致へ向かう一元論的な方向とそうした意識体験を含んでいるが、古典文明期の哲学ではむしろそれは「デフォルト」であった。そういう伝統があまり入ることなく、入ったとしても抑圧する傾向があったヨーロッパ文明（特に西方の）はそれを理解せず、むしろ蔑視していたということになるだろう。それは、ヨーロッパ文明が当時の文明中心地から見れば辺境にあったということと、二元論的なキリスト教の影響によるものである¹³。

2-4 新文明期の哲学

ポストモダンとは、近代文明を終わらせるプロジェクトである。つまり「近代の終活」である。そういう見方をすればわかりやすい。

主観-客観という認識図式や、知識の確実性、理性の絶

対性などはすべて相対化された。理性的認識を推し進めても真理の認識に至ることはないことが確定したのである¹⁴。もっともそういうことは昔から非ヨーロッパ文明圏ではあたりまえのことであったのだが。

これは実質的にはニーチェがやってしまったことの後追いである。ニーチェが大胆にやったことを、韜晦によってアカデミー内部からの侵蝕としてやろうとしたものである。だから私たち非欧米人がこうした動きをそのまま輸入したりすることにはあまり意味はない。これはあくまでアカデミーの哲学の自己反省、自己否定にすぎず、その範囲の話でしかないのだ。

むしろ新文明期への移行は、アカデミーの外部で起こりつつある。

古典文明期において、少数の人々により追求されてきた、神人一致の「一」の探求、つまり「目覚め」と呼んでもよいが、そうした事象があるということが、欧米社会の一般の人々にも知られてくるようになった。これは大きな文化変容の可能性を持っている。

つまり、二元論的なキリスト教の方向性が、古典文明期的な標準から見れば逸脱であり、そこでヨーロッパ文明が一時、人類が持っていた英知の歴史を見失ったということが意識され始めた。はじめて本格的に、古典文明期の哲学の本来のものとヨーロッパ文明との出会いが起こって来たのである。

たとえばエマーソンの哲学はそのほしりと見るべきものである。その後アメリカで隆盛となったいわゆる「ニューソート」の思想は、二元論的なキリスト教観を徹底的に修正して、一元論的な解釈を推し進めている¹⁵。

また鈴木大拙といった禅僧、ヴィヴェーカーナンダやヨガナンダなどのインドのヨーガの師匠、亡命したチベット仏教僧など、書物を通してではなく直接その伝統を体現した人物が西洋で教えるようになって、西洋人のこうした伝統への理解は大幅に進展した。

また、いかなる伝統とも関係なく自然と「目覚め」の経験をしはじめ、後からそれが過去の伝統で言われていたことであることに気づくような人も多数出現している¹⁶。

カレン・アームストロングのベストセラー『神の歴史』¹⁷もこういう流れにあって、これまでの二元論的な神のコンセプトではなく、「内なる神」というコンセプトが浸透し始めたことを示している。こうした流れを「西洋の東洋化」と呼ぶ人もいる。東洋化とは、神を自分の外部に見るのではなく、神性を自己の内に見出す方向性のことを言うのであろう¹⁸。

以上、新文明期への移行が既に始まっているのであるが、まとめていえばそれは、近代の二元論的な文明原理の終了であり、古典文明期の哲学が新たにとらえ直される時代だと言えるだろう。新文明期の哲学は一元論的なものになり、神人一致や内なる神性といったコンセプトが人々の常識となるまでに浸透していく可能性がある。大きくいえば人類が民族や宗教の限界を超えて一つになっていく真のグローバルな文明の始まりとなるのである。そのためには、キューブリックの「2001年宇宙の旅」のヴィジョンにもあったように、新たな意識をもつ人類の誕生が必要である。

しかしおそらく、それはまったく新しいものではなく、

古典文明期の哲学において、少数の人々には理解されていたものである。ただ、その時代は地球全体が本当にむすびつくような技術はなく、彼らが知られていた範囲は限られていた。それが、以前は考えられないほど多くの人々がそうした知識を知り、体験もするようになる、という時代が変わっていくのではなかろうか。

3 まとめ

以上、現在の私たちは、いわゆる「シンギュラリティ」のポイントを通過し、まったく未曾有の歴史段階にさしかかったという認識から、人類による真理探求の歴史を四つに区分する新たな視角を提案し、考察を行った。その結果、近代文明期の枠組を絶対化せず、むしろ古典文明期の遺産を再評価する必要性が指摘された。

現在の、オフィシャルな哲学は、残念ながら近代文明期にできあがった常識や枠組の上に成り立っており、新文明期には対応できないのではないかという危惧も感ずる。そもそも哲学という真理追求そのものである行為が、ピアレビューによる、近代アカデミーの枠組における「学問」でなければならない理由があるのか、そこまで根源的に問い直すことが必要ではないであろうか。

むしろ、21世紀に本格化している新文明期への移行においては、より世界的な視野で、過去に人類が形成した叡智の伝統としての古典文明期の哲学という遺産をしっかり受け止め、そのエッセンスを新しい社会にどう生かすか、という視点が必要とされるだろう。そのためにはもちろん、哲学とは理性だけで遂行するものではない、という認識も不可欠である。より全人的な認識のあり方に基づいて、体験と知性が一体化し、より深い世界の認識を「体现」していく、という方向で進むしかないであろう。それが、哲学というものの本来のあり方ではなかったであろうか。哲学は再び、ウェイ・オブ・ライフ、「生き方」の問題となるのである¹⁹。

注釈

- 1 丸山真男：日本の思想 岩波書店 1961
- 2 井筒俊彦：意識と本質：精神的東洋を求めて 岩波書店 1983
- 3 エリアーデは、シャーマンの体験を本質的に変性意識体験だと見なしている。ミルチア・エリアーデ：シャーマニズム上・下 筑摩書房 2004
- 4 伝統的なインドの方式でインド哲学を学んだ向井田みおによるインド哲学解説書が出版された。これは新しい傾向を示すものだろう。向井田みお：やさしく学ぶYoga哲学 ウパニシャッド アンダーザライト・ヨガスクール 2016（他に同じ著者により、バガヴァッドギーター、ヨーガストラについても出版されている）。英語圏では、伝統的方式でインド哲学を学んだ人としてDavid Frawleyの存在が知られる。David Frawley: Hinduism: the eternal tradition: Sanata Dharma, Voice of India, 1995 その他。
- 5 たとえば、スヴェトラナ・セミョーノヴァ他：ロシアの宇宙精神 せりか書房 1997
- 6 アーサー・O・ラヴジョイ：存在の大いなる連鎖 筑

摩書房 2013 この世界観は、キリスト教とプラトン哲学を巧みに調和させたものであり、伝統的なヨーロッパ文明の一つの到達点として、最近、再評価する動きが見られる。たとえば、Hans Boersma: Heavenly Participation: The Weaving of Sacramental Tapestry, Wm. B. Eerdmans Publishing, 2011

- 7 このとらえ方は、有名なリン・ホワイトの主張に近い。彼は生態学的危機の根源をキリスト教に見ている。反面、アッシジのフランチェスコに新たな可能性を見出しているが、キリスト教のうちにも一元論（すなわち自然と人間の一体感につながる）への方向性も内在していたことを彼も理解していることになる。リン・ホワイト：機械と神：生態学的危機の歴史的根源 みすず書房 1999
- 8 たとえば、アルネ・ネス：ディープ・エコロジーとは何か：エコロジー、共同体・ライフスタイル 文化書房博文社 1997
- 9 エイブラムズは、ロマン主義は近代以前の世界観の復興を企てるものであったと結論している。M・H・エイブラムズ：自然と超自然：ロマン主義理念の形成 平凡社 1993
- 10 これは、量子力学における観察者の問題ともつながる。
- 11 「ツァラトゥストラかく語りき」の第71章「七つの封印」より。
- 12 こうした地下水脈的な流れは「エゾテリスム」と呼ばれている。これについての概説は、アントワヌ・フェーヴル：エゾテリスム思想：西洋隠秘学の系譜 白水社 1995 あるいはWouter Hanegraaff: Western Esotericism: A Guide for the Perplexed, Bloomsbury Academic, 2013を参照。また、こうしたエゾテリスムの流れは、20世紀後半の新しい思想運動に大きな影響をもたらした。これについては、Wouter J. Hanegraaff: New Age Religion and Western Culture: Esotericism in the Mirror of Secular Thought, SUNY Press, 1998
- 13 なお、古典文明の中でもイスラーム文明は、中世ヨーロッパと同様、一元論と二元論が共存しているところがあり、インドのような典型的な古典文明とはいささか異なっている。イスラーム文明の位置づけについては今後の課題としたい。
- 14 またこれは「女性性の回復」という文脈でも語ることができる。理性偏重を是正し知のあり方そのものを変えるという方向性を持っているのが思想運動としてのフェミニズムである。
- 15 ニューソートについては、マーチン・A・ラーソン：ニューソート：その系譜と現代的意義 日本教文社 1990 参照。
- 16 これらはインド哲学のヴェーダーンタの言葉を借りて「ノンデュアリティ」の立場と呼ばれることがある。また、欧米で広く知られているのはエックハルト・トルドである。
- 17 カレン・アームストロング：神の歴史：ユダヤ・キリスト・イスラーム教全史 柏書房 1995
- 18 Colin Campbell: Easternization of the West: A Thematic Account of Cultural Change in the Modern

Era, Routledge, 2008

- ¹⁹ 古代ギリシアやローマ期の哲学は「生き方」の問題であったことについては、Pierre Hadot: *Philosophy as a Way of Life: Spiritual Exercises from Socrates to Foucault*, Wiley-Blackwell, 1995